

全国初・地域おこし協力隊映画  
オーディション本読み用脚本

山下大裕

【E】主婦の世間話く移住者の一人  
娘（高校生）と香澄のやり取り。

○登場人物

・香澄（20代女性）

※主人公の名前は仮名です。今後  
変更となる可能性があります。

・美鈴（18歳女性）高校生

・主婦A（3〜50代女性）

・主婦B（3〜50代女性）

スーパーで世間話をする主婦。

主婦A「マイルドな鹿児島弁で」

最近うちの近くに変な人越して  
きたのよ」

主婦B「マイルドな鹿児島弁で」

あの一人で都会から来た人？」

主婦A「そうそう。あの何とか応援  
隊みたいなので役場に入ってる  
みたい」

買物に来た香澄、主婦たちの声  
が耳に入り立ち止まる。

主婦B「あれでしょ。農業も知らな  
いのにアボカド作りたいって身  
一つで来て…」

主婦A「それは前の人でしょ。今度  
の人はね…あれ、何しに来たん  
だっけ？」

主婦B「最近若い人の田舎暮らしが  
流行ってるでしょ。こんなとこ来  
て何すんのかねえ？」

主婦A「どうせまた前来てた人みた  
いにすくないなくなるわよ」

と、突然横から美鈴に声を掛け  
られ驚く香澄。

美鈴「（標準語）ねえ、変な人」

香澄「わっ、びっくりした」

美鈴「あんたどこの人？」

香澄「あんたって…」

美鈴「言っとくけど私の方が先にこ  
つち来てるからね」

香澄「あなた鹿児島じゃないの？」

美鈴「名前は？」

香澄「香澄だけど」

美鈴「ふーん」

香澄「今地域おこし協力隊っていう  
のでこっちで働いてるからいろ  
いろよろしくね」

美鈴、香澄の話をおかず適当な  
鼻歌を歌っている。香澄のカ  
トを覗き込む美鈴。

美鈴「料理できなそー」

香澄「はあ？ できるけど」

美鈴「てかアイス買うなら明日がい  
いよ。今日は肉が安い。じゃあね」

と言いながら去っていく美鈴。

香澄「（独り言）変なのはそっちじ

ゃん…」

アイスを返しに行く香澄。

◆子役（小学生男子）でエントリー  
されている方はこちらの【E】の脚  
本で一人称を『僕』に変えてお読み  
ください。（口調などは言いやすい  
ように変えていただいて構いませ  
ん）

全国初・地域おこし協力隊映画  
オーディション本読み用脚本

山下大裕

【F】近所のおばあさんから食べ物をもらうが本当は困っている香澄。

○登場人物

・香澄（20代女性）

※主人公の名前は仮名です。今後変更となる可能性があります。

・おばあさん（7〜80代女性）

香澄、家に帰ってくると玄関先に白菜が三玉置いてあるのに気づく。

香澄「はあー、またこんなに……」  
と、近所のおばあさんが大きいタッパーと掘りたての大根を持ってやってくる。

おばあさん「きつめの鹿児島弁で）  
香澄ちゃん、これ今年の梅干しと大根。ほら、美味しそうでしょ」

香澄、申し訳なさそうに、  
香澄「あの一、いつもありがたいんですけど私ひとりじゃこんなに食べられなくて、結局捨てちゃうんです。白菜もこんなに……」  
おばあさん「白菜はお漬物にしたら美味しいよ。ねえお漬物作ったことある？ 今度日曜日教えるからうちにいらっしやい」

香澄「日曜日は……」  
おばあさん「役場はお休みでしょ。妙子（たえこ）さんにも声かけとくから、ね！」

香澄「……」  
おばあさん「はい、これ梅干し」  
おばあさん、香澄にタッパーを

半ば強引に渡す。

香澄「私梅干しちよつと苦手で」

おばあさん、香澄の言うことが聞こえていない。

おばあさん「足りなくなったら言いなさいね。いっぱいあるから。あらもうこんな時間。じゃあ日曜日ね」

おばあさん、笑顔で去っていく。

香澄「もう……」

全国初・地域おこし協力隊映画  
オーディション本読み用脚本

山下大裕

【G】行きつけのカフェにいる香澄。

○登場人物

・香澄（20代女性）

※主人公の名前は仮名です。今後  
変更となる可能性があります。

・マスター（50代男性）

・マスターの妻（4〜50代女性）

香澄、白菜を抱えてカフェにや  
ってくる。

香澄「こんにちわー」

マスター、香澄をからかう。

マスター「（標準語）また邪魔しに  
来たー」

香澄「違いますー」

マスターの妻、白菜を見て、

マスターの妻「（マイルドな鹿児島  
弁）それどしたの？」

香澄「またこんなにもらっちゃった  
んです。食べ切れないって言って  
るのに」

マスターの妻「そこ置いときな」

香澄「私、白菜好きだったのになー」

もう嫌いになりそう」

マスターの妻「悪気はないって。ご

飯食べたの？」

香澄「まだだけどお腹すいたー」

マスターの妻「今マスターが作るか  
らね」

香澄「やったー」

× × ×

香澄、ランチを食べながら、

香澄「私なんか噂になってるみたい  
なんですよー」

マスター「料理できないって？」

香澄「料理できるから！ じゃなく  
て、なんか変な人みたいに言われ  
てるかも」

マスターの妻「全然変じゃないじゃ  
ん。一生懸命やってるし」

マスター「変っていうのは、受け取  
り方によっちゃ褒め言葉だから  
ね」

香澄「そう思うのはマスターだけで  
しよ。それにめっちゃ噂広まるの  
早いし勝手に話盛られるし、そう  
いうとこ本当嫌い」

マスターの妻「田舎はどこも同じ  
よ」

香澄「面倒くさ」

マスター「（冗談っぽく）今度、香  
澄結婚するって噂流しとこう  
か？」

香澄「ちよっ、それ本当やめて！

マジ一瞬で広まるから」

マスターの妻「お腹に赤ちゃんいる  
とか言われそー」

香澄「そうこの辺の人すぐ話盛るか  
ら。怖過ぎ」

マスター「怖いよこの町はー」

香澄、食事を終えお茶を飲む。

香澄「私のこのお店なかったら実家  
帰ってたかも」

マスターの妻「いつでも来ていいか  
らね。その代わりお客さん扱いし  
ないけど」

香澄「ありがとう」

マスター「（冗談っぽく）うちの店  
は本当金にならん客ばっかです  
わ」

マスターの妻「本当よ」

笑い合う三人。

全国初・地域おこし協力隊映画  
オーディション本読み用脚本

山下大裕

【H】タロット占い師に相性を見て  
もらう香澄。

○登場人物

・香澄（20代女性）

※主人公の名前は仮名です。今後  
変更となる可能性があります。

・タロット占い師（4〜70代男女）

※占い師の年代性別は検討中

※インパクトあるキャラを想定

占い師、タロットカードをじっ  
くり見て深く頷く。

占い師「（標準語）うーん、（香澄を  
見つめて）あなたよく我慢したわ  
ね」

香澄「はあ……」

占い師「もう少しだわ」

香澄「もう少し？」

占い師「お相手さんはね、今あなた  
のことが気になってるわよ」

香澄、疑っている。

香澄「本当ですか？ 全然そうは見

えないけど……」

占い師「嫌われてはいないでしょ」

香澄「多分……だけど全然いい雰囲気  
とかでもないですよ」

占い師「あなた、一回振られてるわ  
ね。でもあれはね、もうちよつと  
押せば行けたのよ。相手ももつと  
押されると思ってたみたい。だけ  
どあなたはサツと引いたでしょ」

香澄「はい」

占い師「でもね、大丈夫。それがか  
えって彼を惹きつけたの」

香澄「嘘ー？」

占い師、タロットカードをシャ  
ッフルし、

占い師「じゃあ今度は二人のこれか  
らを見てみるわね。はい、これを  
また左手で三つに分けて」

カードを分ける香澄。

占い師、カードを順序良く並べ  
開き見つめる。

占い師「うん、間違いない。今よ、  
今。もう一回いつてみなさい。も  
うこしかないわ。絶好のタイミ  
ングよ」

香澄「それ本気で言ってるんです  
か？」

黙って笑顔で深く頷く占い師。

香澄、考える。

◆本読み用脚本はもう少し種類を  
増やす予定です。（二月十二日中に  
アップします）

◆鹿児島弁については現時点で話  
せなくても構いません。その場合は  
標準語で読んでください。